

試合を終えて笑顔で記念撮影

＝8月19日、サントドミンゴ市で



ケビンソン・マガロ君 父も国内にいますが、出稼(15)はハイチの首都ポルゴでぐくぐくたまに会トープランスの被災テナー程度だ。大地震時はトに祖母と2人で住む。道ばたで被災し、帰ると

# ハイチの少年たちは今

国際医療救済団体「AMDA」(北区)が先月、ドミニカ共和国の首都サントドミンゴで開いた親善サッカー大会。今年1月の大地震で23万人以上が犠牲になったとされる隣国・ハイチの少年たちが招かれ日本、ドミニカの少年たちとボールを追い交流を深めた。母国では地震後8カ月が過ぎた今も150万人以上が被災キャンプで暮らしている。参加した少年たちの生活に迫った。

【石戸諭】

家が倒壊していた。

以来、夜は眠れない日が続く。「暗闇はとても怖い。道ばたで寝ると地震を思い出す。(日本チームと同宿の)ホテルならゆっくり眠れるかなと思った。でも、一人でい

るおばあちゃんが心配」

将来は機械の整備士になりたいと思っている。ただ、それには進学する必要がある。「とてもそ

のお金はない。僕も働かないと」。サッカーは唯一の息抜きだ。ロナウド・デリソウ君(13)は被災キャンプで父と2人で暮らす。「日本の選手と一緒にチームになつてうれしかった。サッカーが上手。将来、お金をためて日本まで会いに行きたい」と試合後、笑顔を見せた。

笑顔は長くは続かなかった。ハイチに戻るバスの中でロナウド君は「仲

のなかでロナウド君は「仲



3カ国の子供がボールを追いかけた親善サッカー

良くなったのに別れたくない。もうテントに帰らたくない」と人目をばはからず泣きじゃくっていた。テントの近くには、飲料水を飲み終えた後のペットボトルや生ゴミなどが山のように積もっているという。「雨が降ると、ゴミが流れることもある。本当に嫌だ」

ハイチの少年との交流を通じて日本の少年は何を考えたか。将来の夢は

「元日本代表の中田英寿さんのようにサッカーを通じた国際支援をすること」という小山諒祐君(12)＝広島県福山市＝は「楽しかったけど、厳しい状況でサッカーをやっていると、自分の考えは甘かったかもしれない」と考え始めた。「支援は簡単にはできないと思うけど、もっとハイチやドミニカのことを知りたい」と話した。

ハイチやドミニカのこと